

# 現職教育資料

	はじめに……………	1
^	1 学級経営について……………	1
第	2 本県の「学級経営にかかわる調査」について……………	1
4	4 5 3 学級が機能しない状況の具体的な指導例……………	2
号	4 学級がうまく機能しない状況に陥った場合の対応……………	3
v	5 魅力ある学校になるために……………	4
	おわりに……………	4

## 学級経営に関する諸問題への対応

### はじめに

近年、児童生徒が勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成り立たなくなるいわゆる学級崩壊の状況が見られるようになってきています。

文部省は、平成12年5月、学級経営研究部会（代表、吉田茂・国立教育研究所長）に委託した調査研究の最終報告書を発表しました。

県教育委員会としても、平成11年10月に「学級経営にかかわる調査」を実施し、状況を把握したところです。

今日の社会の変化や価値観が多様化する中で、「学級経営の在り方」について共通認識をもち、子どもたちの実態に応じた効果的な指導や対応を進めることがより強く求められていると考えます。

### 1 学級経営について

#### (1) 学級とは

現在、学校には教科指導だけではなくそれ以外の多くの機能が求められています。より効率的な運営を行うため、同じ発達課題を持つと考えられる同学年の児童生徒で学級が編成されています。

多様な子どもたちが集まる学級で、葛藤や摩擦が生じるのはむしろ自然な成り行きと言えます。学級経営は、新たな生活・学習集団にその学級固有の秩序を作り上げていく取組です。教師が中心となり、学級の状況をよりよい方向に向かわせることに学級経営の存在理由があります。

#### (2) 学級経営について

新小学校学習指導要領（平成10年12月）において、学級経営と児童生徒指導について、次のように述べられています。

「日ごろから学級経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め、生徒指導の充実を図ること。」

と。【学級経営と生徒指導の充実】（第1章第5の2（3））

教師と児童生徒との信頼関係を築くことは、児童生徒理解の深化とともに、児童生徒指導を進める基盤です。教師と児童生徒の信頼関係は、日ご

ろの人間的な触れ合いとともに、児童生徒と共に歩む教師の姿勢、授業等における児童生徒の充実感・成就感を生み出す指導、児童生徒の特性や状況に応じた的確な指導と、不正や反社会的行動に対する毅然とした教師の態度などを通じて形成されていくものです。その信頼関係をもとに、児童生徒の自己開示も深まり、教師の児童生徒理解も一層深まっていきます。このような観点から、学級経営に当たるよう、全教職員が共通理解をする必要があります。

#### (3) 「学級がうまく機能しない状況」とは

いわゆる「学級崩壊」という呼び方は事態の深刻さを強烈に意識させる響きを持つ言葉ですが、複雑な状況をじっくりと多面的に捉えていく姿勢を弱めてしまう危険もはらんでいます。そこで、「学級がうまく機能しない状況」という呼び方をします。それは、『子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状況が一定期間継続し、学級担任による通常的手法では問題解決できない状態に立ち入っている場合』を指しています。

### 2 本県の「学級経営にかかわる調査」について

平成11年4月～9月の期間中、県内の公立小学校・中学校において次の(1)に示した項目のような状況が見られる学級、学校を調査しました。

#### (1) 調査項目

<p>授業について          体育や朝会等の集合時刻に集団で遅れる。授業が始まっても自分の席に着かず、おしゃべりをしたり、遊んだりしている。          学習用具をわざと用意しない（持ってこない）児童生徒が目立つ。          授業中、トイレや保健室に無断で行こうとする。          授業中、大声を出したり、関係のない話をしたり、ゴミやものを投げたり、教室の後ろで遊んでいたりと、教室から出ていたりする。          担任が個別指導しているあいだに他の児童生徒が学習以外のことをはじめる。</p> <p>生活について          児童生徒間で物隠しなどのいやがらせが目立つ。          掲示物を破いたり、落書きをしたり、ものを壊したりする。</p>
--

小グループに分かれて勝手な行動をするようになり、まとまりがない。  
 清掃時間中、遊んだりふざけたり、清掃以外のことを行っている。  
 気に入らないことがあると大声で泣く、暴れる、暴力を振るうなどする。  
 教師について  
 教師が注意すると、反発したり、反抗的な言動をとる。  
 教師に対して、暴言を吐いたり暴力を振るったりする。  
 教師を無視したり、避けたりする。

足もある。  
 ウ 児童生徒の自己を律する力の未成熟や、基本的な生活習慣の不足が主であるが、教師の指導力不足もある。  
 エ 児童生徒の自己を律する力の未成熟や、基本的な生活習慣の不足が主である。  
 オ その他

数字は学級数を示す

校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小学校	6	9	17	36	13
中学校	1	7	59	48	19

(2) 調査結果

13項目のうち、1つでも観察された学級及びそうした学級が存在する学校は次のようになり、中学校の方が割合が高いという結果を得ました。

該当学級数・学校数

校種	該当学級数	割合	全学級数
小学校	70	1.6%	4471
中学校	115	5.6%	2053

校種	該当学校数	割合	全学校数
小学校	53	12.0%	442
中学校	32	18.3%	175

上記の表のうち、学級の半数以上で観察されると報告があったものは、小学校が2学級、中学校が3学級であり、該当学級の大部分は数人で観察されるという状況です。

観察された主な項目

項目	小学校			中学校
	低学年	中学年	高学年	
	11	8	6	47
	1	2	4	32
	9	3	0	44
	10	9	7	33
	10	6	8	24
	2	3	7	7
	3	3	5	36
	3	1	11	30
	5	3	5	67
	11	9	4	12
	4	3	15	67
	4	2	2	21
	2	3	9	21
他	4	1	1	19

各項目ごとの観察された学級数

小学校低・中学年では「授業中の規律の乱れ」などが多く、小学校高学年や中学校では「教師の指導に対する反発や反抗」など、生徒指導上の問題が多く観察されており、質的な違いが見られます。

主な原因

ア 主として教師の指導力不足による。  
 イ 教師の指導力不足によるが、児童生徒の自己を律する力の未成熟や基本的な生活習慣の不

13項目のような状況に陥った主な原因を教師は、主に児童生徒側の問題と捉えています。

一方、文部省の委託研究の調査結果では学級がうまく機能しない状況にあるとした150学級のうち約7割にあたる104学級が「教師の学級経営が柔軟性を欠く」と報告されており、教師の経営能力の向上を求めています。

県総合教育センターが行った「望ましい学級経営の在り方に関する調査研究」（中間まとめ）によりますと、教師の子ども側が原因とする意識は、「基本的な生活習慣の未定着」「人間関係づくりの未熟さ」「特別な支援が必要な子供の存在」「怠惰やストレス」などが示されています。

また、教師側の要因としては「多忙さ」「子どもたちの内面や行動の理解のしにくさ」「校内体制の不十分さ」などが意識されています。

3 学級が機能しない状況の具体的な指導例

学級が機能しない状況のイメージを、事例から捉えてほしいと思います。

事例1（小学校第2学年）

集団への適応が困難な児童に学級全体がふりまわされている

授業のチャイムが鳴っても、数名の児童が廊下に出て水を飲んできたり、床に寝ころんだりしています。担任が、「席に着きなさい。」と注意すると、「さんも席についていない。」など言い訳を主張するだけで着席しません。特定の児童に個別指導をしていると、他の児童がおしゃべりを始めたり、教師の目を盗んで席を離れたりし始めます。

教師は、特定の児童を注意することが多く、その児童は不満がたまっています。また、それをきっかけに、学級としてのまとまりに欠ける毎日が続いています。

原因は、主に次の3点が考えられます。

幼児期の不十分な家庭教育

幼少期によいことと悪いことを判断することを身に付けられなかったのではないか。

教師の児童理解不足

児童の生育歴や能力を理解した上で個に応じた指導ができなかった。

人とのかわりあいの希薄さ

社会性が未発達で、集団生活に適応できない。

事例2 (中学校第1学年)

**一方的に生徒に価値観を押し付けたことに反発**

授業中、一部の男子生徒が授業の用意をしなかったのに注意したが準備をしようとしません。教師が再度注意したところ、生徒はしぶしぶ授業の用意をしました。学校生活の決まりについても、教師が一方的に決まりを押し付けていました。そのような折、集団による特定の男子生徒へのいじめが起こり、教師が強く指導することが増えていきました。次第に教師の一方的な指導に、他の生徒も反発するようになりました。

毎日、強く指導しても効果がないことに悩んだ教師が、同じ学年の教師に相談し、学級の様子を話しました。その学年の教師が、学級の生徒に対し、教師に反発する理由を聞いたり、担任教師の気持ちを伝えたりしましたが改善されません。

原因は、主に次の3点が考えられます。

**教師の普段の指導への反発**

授業中、教師からの一方的な話が多く、生徒からの質問や意見を受け入れようとしない。生活のきまりを守らない生徒には、理由も聞かず責めてしまい、きまりのよさについて生徒と話し合うようなことがなかった。

**保護者からの不信感**

ある時、ふざけて学級の友人にけがをさせた生徒に対しての指導が適切でなかったことから、保護者の不信が募った。

**教職員の連携不足**

担任は学級内の問題として捉え、他の教師に相談せずに指導を続けた。その後、学年会や生徒指導部で話し合いをもち、担任以外の教師が指導に当たったが、担任との連携がうまくいかず、逆に生徒の担任への不信感が増してしまった。

4 学級がうまく機能しない状況に陥った場合の対応

(1) 学級がうまく機能しない段階での対応

学級担任が問題を一人で抱え込み、深刻な事態を招くことのないよう、日ごろから気軽に相談できるような環境づくりを心がけることは言うまでもありません。万一、学級がうまく機能しない状況に陥った場合は、早期に校長がリーダーシップを発揮し、閉鎖的な雰囲気や打撃を打破し、適切な組織を編成して対応し、全職員で危機を乗り越える気構えが必要です。

事態が困難になるまでの段階を初期、中期、困難期に分け、それぞれの段階での考えられる対応について示します。

初期	数名の児童生徒が問題行動を起こし、学級としてのまとまりが弱くなった時期
----	-------------------------------------

- ・事実の分析と児童生徒理解に努める。
- ・学年主任や校長、教頭などに相談する。
- ・必要に応じ、学年会などで対策を立てる。

中期	学級としてのまとまりがなくなりつつある時期
----	-----------------------

- ・保護者と連絡を取りながら指導に当たる。
- ・教師の意識改革に努める。
- ・教師と児童生徒、児童生徒同士の間関係を強くする活動を計画的に行う。
- ・全校での指導体制の下同一歩調で指導する。
- ・具体的な方策を立て、役割を決め対応に当たる。
- ・保護者会を開き、協力を得る。
- ・教育相談体制を見直す。
- ・教育委員会、医療機関、各種相談機関等への相談を積極的に行い、助言を得る。

困難期	学級としてのまとまりのない状態が1か月以上続いている時期
-----	------------------------------

- ・職員会議や学年会議などで指導の方針を検討し、新たな方策を立て、指導に当たる。
- ・専門機関の助言を得る。

早期に組織的な対応を行うことを心がける。指導には、柔軟な姿勢が必要です。	
--------------------------------------	--

(2) 発達段階ごとの指導

小学校の低学年で起こる状況と小学校の高学年や中学校で起こる状況には、かなり違いがあるようです。次は、児童生徒の発達段階に応じた対応を示します。

小学校第1・2学年の時期

教師は、幼少期のしつけ等を基本に、集団における基本的な生活習慣や他者を思いやる心などについて、家庭の協力を求めつつ、身に付けるような時間を少しずつ伸ばしたり、場面ごとに重ねて指導したりしながら育成していくようにします。

指導については、学級で生活する上での最低限のルールとして、はっきりとあいさつをすることや人の話を静かに聞くこと、身の回りの整理整頓や係活動を責任を持って行うことなどについて、具体的に児童に示してやるのが効果的です。

小学校第3学年～第6学年の時期

この学年は、最後まで責任を持って取り組むことを学ばせることとともに、他者の立場になって物事を考えられるようにすることが必要です。また、第5学年以上になると、目標をもって物事に取り組むこと、学習の意義や大切さ、義務を果たす責任感のほか、問題解決に向けて、よりよい方法を工夫しつつ自己を高めていく姿勢も望まれます。

学校では、学級での生活の場面や各教科の授

業、道徳の時間の授業、特別活動の具体的な場面を通して、これらの点を意図的に指導していく必要があります。指導に当たっては、単調な学習等に対する不満が高まったり、教師の考えの押しつけに対する否定的な考えが強まったりしてくるので、教師は児童の人権と主体性を尊重しつつ、魅力的な授業・楽しい授業・分かる授業の実践を特に心がけることが大切です。

中学校期

中学生になると小学生以上に心理的に不安定な時期を迎えます。約束やルールを守ることの重要性については理解できているものの、教師や学校、家庭に対する不満や反発から、わざとルールを破ることもあります。

生徒への指導については、威圧的な命令口調ではよりよい人間関係は保てず、信頼も得にくいので、教師は指導者としての自覚を持ちつつも生徒の自尊心に配慮しながら、自らの言動に責任を持ち、生徒理解に努め、自己啓発にも努力するなど、自らを律する姿勢が大切です。

教師と児童生徒、児童生徒相互の人間関係づくりを工夫する。 一人一人の不安や葛藤に対する教育相談的なかわりをもつ。
(7) <u>カウンセリングマインドに立つ児童生徒理解を心がける。</u> 積極的にほめる。 客観的に理解する。 共感的に理解する。 多面的に理解する。
(8) <u>自らが受け入れる学習規律を確立する。</u> 発達段階に即して学習規律を育てる。 規律は守ることが大切と気づかせる。 いやなことやつらいことも経験させる。
(9) <u>研修会を積極的に活用する。</u> 固定観念を取り除き、児童生徒の変化を捉える。
(10) <u>保護者の力を活用する。</u> 保護者に実態を知らせる。 保護者の力を借りる。

5 魅力ある学級になるために

ここでは、いわゆる「学級崩壊」などを生まない、魅力ある学級づくりのために教師や学校がどう取り組めばよいかを示します。

(1) <u>学級の実態を捉える。</u> 授業中や生活場面での様子に気を配る。 性格や家庭環境を把握する。 学級内の人間関係を把握する。
(2) <u>教師の願いや思いを伝える。</u> 学級経営の願いを示す。 必要なときは毅然とした態度を示す。
(3) <u>抱え込みをなくし、積極的に助力を求める</u> 学年主任や、校長、教頭に相談する。 専門家の力を活用する。
(4) <u>指導スキルを身につける。</u> 指示や説明のノウハウを身につける。 自分勝手な行動を制止するスキルを身につける。
(5) <u>魅力ある授業を心がける</u> 教科の本質に根ざした魅力ある授業づくりに心がける。 教師の姿勢、態度を大切にす。 自己決定ができる場を設定する。 温かい雰囲気づくりを心がける。 存在感を味わうことができる場を用意する
(6) <u>ふれあいで人間関係を育てる。</u> 意図的・計画的な体験活動で信頼感や所属感を育てる。

おわりに

たとえ、ベテラン教師でも学級が機能しなくなる状況に陥ることが報告されています。教師は柔軟性をもって現代の子どもたちとつきあっていく必要があります。

常に自分の学級経営を再点検し、学級経営の改善に当たるようにしましょう。

**ティータイム**  
**犬によるヒーリング**

犬を久しぶりに飼い始めたのは、友人が「学校にたくさん子犬が捨てられていたので犬を飼わないか。今のうちなら選べる。」と電話をかけてきたのがきっかけである。無理だとは思いつつ、子どもを連れて見に行くと、もう飼えない理由などなくなってしまった。

共働きで昼間誰もいない家で寂しい思いをさせている。家人が刺身を食べさせた時はお腹をこわし、ずいぶん顔色が悪かった。それでも人を恨むということを知らない。どんなに遅く帰宅しても、耳をねかせ体中で飼い主が戻った喜びを表現しながら迎えてくれる。毎日こうした再会劇を繰り返している。

犬は「心を癒す」動物である。